

「月が奇麗きれいですね」と言え

「ちよつと好きって言ってみて」

「え？」

先輩の言葉に耳みみを疑うたがった。読んでいた本から目を上げて言う。

「今部活中ですよ」

「部活終おわった後ならいいの？」

先輩が首かみを傾かげる。話が噛かみ合あわないので無視をした。開けた本の文字を先輩の小さい手が覆う。

「無視するな」

「今度は何の影響ですか」

「今読あんでるまんが。もう甘あまっ甘あまなの。もう甘あまっ甘あま。私もそんな青春あまがしたい」

「どうぞして下さい」

先輩は「はあくあ」と叫いび椅子いすの上でのけ反ぞ

った。明らかな非難のため息に呆れて本を閉じる。女の子とは思えない態度と、美しい頸筋。ぼくは「先輩」と呼んだ。

「何」

「好きです」

先輩が胡散臭そうに眉を顰めて身を起す。

「君に言いたい事がある」

「なんです」

「物事にはタイミングというものがある。夫を勉強しなさい」

「でも好きです」

ぼくは先輩を見詰めた。

「本当に」

言うと先輩は「え、あ」と真っ赤になって狼狽えた。

「そういう芝居？」

「本音です」

「ちよつと、待って」

目線を合わせられなくなった先輩の右手を取る。両の手で包み込む。敢て何も言わずにい

た。人さし指を撫なでると、かすかに震ふるえてい  
る。

「本気？」

「本気です」

立たち上あがり、抱だき締しめて先輩の額ひたいを胸むねに押  
し当てた。

「ははははははは」

一緒に帰ると、先輩は興奮した状態で左手  
に持もった鞆かばんを大きく速く回した。

「危あないですよ」

「そうだったとはね、君がそうだったとは」  
今日十回以上言った言葉を又また独つ語ごく。独つ語ご  
くと言いったが随ずい分ぶん大きい声だ。「近所迷惑で  
すよ」季節柄きせつがらまだ明るいとは言え、十八時を  
過ぎていたので注意する。

「ははははははは」

笑わらうが、真ま面おもにぼくのことを見ようとしな  
い。耳みみも真まっ赤かだ。距離きょりが、いつもより離れ  
ている。

先輩が発作ほつさのように突然声を上げる以外は、会話らしいものもなく二人で歩いた。夏の空は、青く、美しくうつくしい。白い雲も、情緒じょうしよを添える。「先輩、ほら」雲の厚みが立体的で、指し示そうと肘ひじに触れると、先輩の肘は遠くに逃げた。

「どどどどうしたの」

「いや、空が奇麗きれいだったので教えようと思った丈だけです。いつも先輩の方が躁然はしやぎ回るじやないですか」

「ききき奇麗」

先輩が固まるので言い足す。

「いや、空の話ですよ。先輩は奇麗きれいと言うより可愛かわいいです」

「か」

先輩が完全に固まったので手を握って引いて歩く。掌てのひららが汗で濡れていたが、不快感はないかった。

家で勉強していると、先輩からメールが届

いた。随分ずいぶん長い。文面からも躁然はしやいだ様子が伝わってくる。返す為にメールを作っている  
と、電話が鳴った。

「はい」

「今何してるの」

機嫌の悪そうな声だった。十日前に別れた元恋人だった。

「メールを作ってた。夫それと勉強」

「ふうん、私への謝罪のメール？」

「違う。恋人へのメール」

「は？ もう彼女できたの？ 考えらんない何も反省してないのね。あんたは彼女作るのが向いてないのよ、これ以上の犠牲者が出ないよう今すぐ別れなさい。あんた『好き』って気持ちほんとに分わかつてんの？」

「自分なりには」

「あたしと付き合った当初と今の彼女への気持ち、どっちが強いのか」

「わからない」

「ほら見なさい。『好き』っていうのはね、

勘違いでも何でも『この世界にこの人しかない』っていう特別な、純粋な気もちなのよ。あんたに夫があるの？　ないでしょ。あーあまた罪のない女の子が心の傷つくるのね。かわいそう」

一頻りぼくを責めると元恋人はブチリと電話を切った。何が言いたかったのだろうと思う。同時に途切れた携帯電話を見つめて、先輩への気もちの揺ぎを感じる。

下駄箱で靴も履き替えずに手紙を見ていると、後ろから追突された。

「どーん」

「痛い。おはようございます」

「おはよう、おはよう」

打衝かってきたのは先輩だった。随分顔が緩んでいる。もう一度「痛い」と主張してみる。

「何」

「いや、背中が痛いなと思って」

「何、謝罪を要求している訳？ 夫ともさ  
すつて欲しいの。さす」

自分で言つて想像したのか先輩は赤くなつて止つた。謝罪は諦らめて持つていた手紙を脇に挟み、靴を履き替える。「それ、何」と先輩が脇の手紙を指した。

「ラブレターです」

「ラブ？ 誰の？」

「見たことない名前ですね。一年の子かな。」

放課後校門の前で待つてるとありますね」

先輩の顔が驚ろいたまま止つた。「どうするの」固い表情のまま言う。

「断わりますよ。会つて断わるか、放つておくか、其所が問題です」

「……会つて言つて上げなさい」

先輩が静かに言つた。会つた当初の勢いを思い浮べて、夫々の美しくさを並べる。先輩の背中をさすつた。先輩は「だわあ」と叫んで走つて逃げた。

「先輩」

校門へ行くと、可愛らしい女の子が立っていた。背が小さい。ここじやあなんだからと言つて近くの公園へ誘つた。女の子は俯向き、始終もじもじしている。

「それで、話つて？」

いつまで待つても話さないの、ぼくから促がした。「あの、私」言いながら俯向きは更に益す。指を組み換え組み換えしている。何を逡巡つているのだろう。好きと言う丈じやないか。ぼくはごめん或はいいよと言う。十秒で終るやり取りに何故これだけの間が必要なのだろう。手紙を貰つた時点で大体の用事は分つている。ぼくからごめんと言つていものなら言うけれど。考えながら待つていと女の子はやがて口を披いた。

「あの、私」

「うん」

「先輩のこと、先輩のことが」

「うん」



「……………」

「うん、ぼくの事が？」

「遠くから見ていて、あ遠くからって言うてもストーリーカーじゃないですよえへ。逮捕されちゃうーて先輩通報しませんよね優しいからえへ。あ、何で優しいか知ってるかって言うと彼女さんですね、話しているのを遠くから見まして、あ遠くからって言うても今度は会話が聞えるぐらいの距離だったからそんなに遠くないかもしれないですね、その話してる時の声とか顔とか態度が大変優しいんだなあと、思いましたですね」

「うん」

「私、私も、こんなかつこいい人にこんな優しくされたいなあと、思いましたですね、かわいい彼女さんがいるの分ってるんで私みたいなチビで鈍くさい女の出る幕じゃあないと、夫は分ってるんですけど、あの、できれば気もち丈は伝えたい、あ違った噂ですね、結構早く彼女さんと別れちゃうこと多いっ

て、聞いてですな、あ違う違う違います私もチャンス下さい！ 一週間でいいです」

緊張で張り裂けそうな様子が伝わり、面白く思った。女の子は膝の上に置いた拳を見つめ、肩を震わせて返事を待った。その肩に手を置いて優しく諭したが夫は控えた。

「ごめんね」

できる限り穏やかに話しかけた。

「今恋人がいるから。ごめんね」

「いえ、ありがとうございます」

女の子は立って最後に笑顔で言った。美しく思ったが、夫は言わずにいた。「結構早く彼女と別れる」という噂にも、弁明したく思ったが、夫はやめて女の子と別れた。

「好きだよ」

言うと思う。好きだと言うことに、何の恥らいや抵抗があるだろう。好きなのだから、気もちの儘伝える丈だ。なのに先輩は恥し

がる。夫を面白いと思う。「好きがわかるの」と言った元恋人の言葉を思い出す。自分なりには分わかっている。胸の中に答えがある。夫それをそのまま言葉にすることはできない。だから代かわりに「好き」と言う。夫それだけのことじゃないかと思う。

先輩のことを、特別と思っている。ただ「特別」と「好き」が同じと思わない。確かに、元恋人のことも特別と思っていた。いつか特別じゃなくなった。夫それは、いつから左そうなったものか分わからない。先輩もいつか特別じゃなくなるかもしれない。夫それでも、今は、特別だ。ただ「特別だよ」では伝わらないので、好きだよと言う。

「ちよつと、待って」

先輩がぼくを押し留とどめた。ぼくの室へやにいて、押し倒した所だった。電気はもう消している。唇あわを合あわせると、もう一度ちよつと待ってという。

「心の準備が」

言うので、抱き締めて髪を撫でた。艶のあ  
る黒い髪。先輩は少し震えて言った。

「私、スタイルにも自信ないし」

「大丈夫。女の子はみんな奇麗だから」と  
言おうとしたが、誤解を招きそうなので控え  
た。引き続き髪を撫でていると、「経験、あ  
るの」と先輩が訊いた。

「少しだけね」

「じゃあ無理。今日は絶対無理。無理」  
頑くなに言うので笑って仕舞った。

「じゃあ、もし経験なかったら？」

「それはそれで無理！」

叫んで獅噛み付くので尚笑った。今日は諦  
らめるか。狭い額に口付けて抱き竦める。

「ごめんね。初めてだから、怖くて」

「ううん、ごめんね。強引だった」

肌を合わせる喜びを知らなければ、迫らな  
っただろうかと思った。万一こどもが出来て  
も、ぼくにはどうにもできない。でも抱きた  
いと思った。思っただけで迫るなら、獣と

一緒だなと思った。

気付けば、夜になっていた。一度起き上あがつてカーテンを開けた。又ベツドまたに寝転ぶ。明あかりも点つけずにいると、月がよく見える。今日は満月だった。「きれい」先輩が独語つぶやく。

「たしかに、きれいだ」

先輩と二人で見る月は、輝いていた。

「ねえ、『月が奇麗ですネ』って知ってる」

「なんでですかそれ」

言うと先輩は笑った。

「『月が奇麗ですネ』って言ってみて」

「なんでですか」

「言え」

「月が奇麗ですネ」

「違ちがう心の込め方が違う！ 月が奇麗ですネと言え」

「なんなんですかそれ。心込めてますよ」

「アイ・ラブ・ユーよ」

「え？」

「アイ・ラブ・ユーを訳やくすと月が奇麗です

ねになるのよ」

「なりませんよ」

「なるのよ。月が奇麗ですネと言え」

「愛してる」

「え？」

「君を愛してる」

言うと先輩は赧くれた様子で「もう、やだ」と言った。

「ありがとう。でも違うのよ。それだけじゃないの。『愛してる』も『好き』も『君が必要だ』も『そのままの君でいい』も『結婚しよう』も『君を守る』も『幸せにする』も『幸せになろう』も許す気もちもそばいに居た気もちも怒る気もちも泣きたい気もちも何も言わずに、手を握ることも抱きしめることも髪を撫なでることも『ありがとう』も『ごめんね』も『月が奇麗ですネ』も『死んでもいいわ』も『アイ・ラブ・ユー』も、胸の中の気もちの、一つの形なのよ。誰かへ真まつすぐに向むかった気もちの、一つの形なのよ」

「じゃあ、先輩の気もちの今の形は」

「……大好きだあ！」

言って先輩は強く抱き付いて来た。先輩の、胸の鼓動こどうが伝わる気がしたが、夫それは自分の胸が速く脈搏みやくう搏うっていたからかもしれない。ぼくは、先輩を抱き返して、月を見上げ、もう一度強く抱き返した。

「誰よりも君が特別だ。今、誰よりも君のことが特別だ」

月明りつきあかだけでなく、街灯の明りあかが部屋を照らした。目を閉じても、先輩のしあわせそうな顔は消えなかった。